

手と手と手

岡山発 国際貢献

国際医療ボランティアAMDA(本部・岡山市楡津は、組織を運営する本部職員五十人は別として、医療スタッフなどは既述のとおり固定されているわけではなく、あらかじめ登録されたなかからその都度、派遣可能な人材を、全国から募るシステムだ。拘束がない分、規制を受けないから、派遣経験を土台に、新たな貢献活動に踏み出す人を輩出している。

内科医三宅和久(三宅)も、その一人。会ったのは昨年秋。ちょうどバキスタン地震の救援活動が行われているころだった。

「テレビを見ると、心が揺れますね。行かなくていいのかと」

イラン、アフガニスタン、ルワンダ…。一九九三年から約十年、AMDAの緊急医療

卒業生

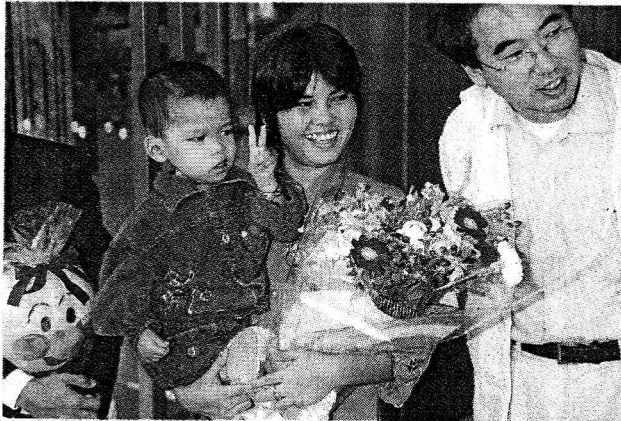
支援には必ずと言っていいほど加わった。現在は故郷、福岡県内の病院で勤務医としている。

「命が助かる、助からないは三日以内に到着できるかにかかっている。着いたからには「手ぶらでは帰れん」と必死だった」

緊急医療の現場を離れて約二年。今は年に一、二回、休暇を取ってミャンマーで、はり・きゅうや吸い玉療法という伝統治療法をボランティアで教える。二〇〇三年には、「SEED」というNGO(非政府組織)を設立。私財を投入し、途上国の孤児教育支援も始めた。「(資金を)小さく出して大きな効果を」。現場で学んだ。

「ありがとう」

倉敷市在住の小児外科医吉岡秀人(吉)は、〇四年からN



手術が成功し、退院を喜ぶミャンマーの男の子と吉岡(右)ら。「一人一人丁寧に」が実現した瞬間だ=2004年10月

GO「国際医療奉仕団・シヤンハート」を立ち上げ、ミャンマーの病院で活動を続けている。AMDAの地域保健医療支援プロジェクトメンバーで派遣されたの

が契機。回国とかわって、十年になる。自分の貯金は全部、組織に入れた。現地の人は雇っても日本人スタッフは無償。ボランティア精神を重んじる。「何万人も救う能

寧に謙虚にやりたい。数よりもクオリティーにこだわりの弱小NGOで、財政面は「こころざし」に懸ける生き方を選んだ。

秋、当時三歳の男の子を岡山市に伴った。首に大きな腫瘍ができる頸部巨大神経線維腫。機器が不十分な現地では、切除手術はできない。国立病院機構岡山医療センター(同市田益)の協

力で、自らも執刀医として立ち会って手術を実施。約五時間半に及んだが、無事成功した。一カ月ほどの入院を経て退院のとき言った男の子の日本語が印象的だった。

「ありがとう」。幼い命の発する短い言葉に、万感の思いを受け取った。

「認められようが、認められまいが、本当に必要なことを信念をもってやる」

AMDA卒業生は、どこまでも真つすべだ。(敬称略)

AMDA卒業生は、どこまでも真つすべだ。(敬称略) 〓「AMDA」の項おわり

自己資金頼り

三宅や吉岡は、AMDA

「ボランティア感覚を守りたい」と吉岡。ボランティアに徹すれば「他人の命と自分の命がつかうがっていることが実感できる」のだという。

三宅には尊敬できる同郷の先輩がいる。アフガニスタンで難民医療などに取り組むNGO「ペシャワール会」の中村哲(五九)だ。アジアのノーベル賞といわれるマクサイサイ賞を受賞した彼の態度に教えられた。

「認められようが、認められまいが、本当に必要なことを信念をもってやる」

AMDA卒業生は、どこまでも真つすべだ。(敬称略) 〓「AMDA」の項おわり

「いろいろござし」に懸ける